

寝床屋の無料配布



御祭  
御祭



・ある日の憂鬱

……

3

「トヤツ！」

花道で役者が見得を切れれば、『大和屋』の屋号を省略した、江戸っ子らしいせっかちな掛け声が、近くから飛ぶ。大向こうなどとも呼ばれる二階棧敷の奥である。押すな押すなの人の入りで、立錐の余地もない。みんな人の頭の隙間からなんとか舞台の切れ端を覗いている状態だ。

栄江もうんうん、と頷く。今回の演目は素晴らしく力が入っている。二階の棧敷も枱席も満員御礼。あまりの混雑ぶりに、芝居茶屋からの料理も運べないくらいだ。舞台の下手側に設けられた席で、ほぼ役者の背中しか見えないような羅漢席までもぎゅうぎゅうに観客が入っている。滅多にない当たり舞台だ。栄江も一幕分の木戸銭しか払っていないが、可能ならば通しで見たいくらいだ。

「随分と腕を上げたなあ」

「おお、それよ。三代目を超えるのもすぐだろうぜ」



「へっ、おめエらの目は節穴じゃアねえのか？ それとも山出しがお江戸に遊びにきなすったか。あれしきじゃア、三代目を超えるなんざアまだまだヨ」

「オヤジ様こそもう目が霞んで碌に見えてねえンじゃアねえか。四代目の立役なんざ当代イッチだぜ」

「なんの所作が粗いわな」

近くの男たちが役者の批評で一触即発の剣呑な空気が流れる。こんな光景も向こう棧敷の特徴だ。ここは一幕ごとの安い料金で芝居が見られる。その代わり、座って見ることは出来ないので、全員立ち見だ。

それでも料金の安さから、毎日のように通う常連が多く、それだけに並の観客よりも目が肥えていたりする。役者批評などここでは当たり前前のことだ。

栄江はそんな光景を微笑ましく思いながら、立役が去り、その後を見送る女形の泣き崩れる場面を、他の観客の頭の隙間から見ていた。

そんな栄江の袂が引つ張られたような気がした。つん、つん、と袂が意図ありげに揺れる。暫し放っておいたが、気のせい、と振り切るには無理があるほどしつこくなる。仕方なく栄江がチラリと後ろを見ると、供としてついて来させたさんじが、なん

とも言い難い微妙な、いやある意味怖いほど必死な顔をして栄江の袖を引つ張っていた。訝しげな顔をしていると、今度は反対の手で、自分の後ろを指さした。その指の先を見ると、実家の手代が不機嫌さも露わにこちらを見ていた。

あらあら。これでは芝居の続きはお預けね。栄江は溜息を吐いた。

「もうおいでいただきませんと。とうに間に合わない刻限ですよ」

木戸を出たところで祥平しょうへいが言う。

「まったく、あの子まだ諦めないのね。困ってしまおう」

栄江は大きな溜息を吐く。とうに老齡と呼ばれる頃合いで、端的に言えば老婆である。花嫁修行のつもりで大名の奥向きへ行儀見習いに入ったが、奥方に大層気に入られ、他の同僚たちにも助けられ、大店とはいえ町人出の少女が奥向きのあれこれを任されるまでになった。結果、ついで誰ぞに嫁ぐこともなく歳を重ねて屋敷を下がることになる。それからは、長年勤めた褒賞にと賜った小さな家に、下女と言うよりは仲間と言いたいような間柄の老婆が一人、そして最近雇い入れた若い下男が一人、と質素に大人しく暮らしている。

樂しみと言えばこうして一幕幾らの芝居を向う棧敷から見ることに。至って普通の老

婆である。

それなのに、彼女には二月に一度は見合いの話が持ち込まれてくる。

栄江は葉種問屋『万代屋』の一人娘だった。実家は亡き両親が見込んで養子に迎えた義理の弟がすでに後を継いでいる。栄江も本当ならどこぞの家に嫁に出されるはずだったが、凶らずもそれは実現しなかった。

そのせいもあってなのか、義理の弟がしきりと見合いを持ち込んでくるのだ。別に仲が悪いとかではない。

義弟が栄江が実家に乗っ取るのではないか、なんてことを恐れているわけでもないし、栄江の方にもそんなつもりは毛頭ない。たとえ栄江が万代屋の実権を握ったとしても、商売はおろか、葉種のことでもてんで判らない。すぐに店を潰すのがオチだ。

義弟が後を継いだ時点で、栄江としては実家との縁は切れたと思っている。商売に口を出したり、あるいは家のことについて何か意見する立場ですらないと一線を引いていた。だが、義弟一家は義理堅いのか律儀なのか、栄江をひたすら姉、伯母、と慕ってくれる。

それについては、栄江自身も有り難く思っているし、これ以上望むべくもなく幸せ



な老後だと思つている。

そう、その見合いさえなければ。

「とつとと片付いときゃ良いものを。アンタみたいな婆さんを嫁に貰いてえなんざ、物好きの極みだな」

へっ、と笑いながら、さんじが生意気にそう言う。その言葉に、祥平がさらに不機嫌な顔でそんな下男を睨み付けた。

「ところで、その男、いつまで傍に置かれるおつもりで？」

「おきゃアがれ。アンタにや関わり合いのねエこつたるゝが。こつちだつて、好きでこんな婆さんのとこにいるんじゃアねエヨ」

さんじも途端に機嫌が悪くなつて、今にも胸倉を掴みあつての喧嘩になりそうなほどの剣呑さでお互いに睨み返す。

「居たくないのならば、出て行けばよろしいのでは？ 誰も止めませんよ」

「アンタに言われるまでもねエワナ。たつた今……」

「コレサ、マア、お前様がた。大声で言い合うものじゃアねえワナ」

芝居がかった物言いで、栄江は睨みあう男たちの視線を塞ぐように、手を顔の間に

差し入れる。そして、さんじの襟首をきゅ、と掴んだ。

祥平とさんじは毒気を抜かれたように、一方下がった。

「ちよ……。コイツアいくら何でも、猫じゃあるめエし」

「まだ往来物が終わらなくてねえ……」

さんじの抗議を無視して、栄江は一つ溜め息を吐いた。

さんじは栄江が拾った。一応下男として家に置いている男だが、元は掏摸<sup>す</sup>だ。人出の多い祭礼時の寺社仏閣で、懐中物を狙う掏摸集團の一人だったのだ。西の市で栄江の胸元に手を突っ込んだままよそ見をしていたさんじを、栄江が捕まえたのが出会いである。

まあ、正確に言うなら、捕まえたわけではない。

逃げようとしたさんじの腕が栄江の袂に何故か絡まってしまい、逃げられなくなっってしまったのだ。はつきり言って、間抜けだ。掏摸と名乗るのもおこがましいと言おうべきだろう。

実際のところ、掏摸集團の中で当時のさんじがどれほどの働きをしていたのか知りようもないが、出会った時の様子——栄江の懐に手を突っ込んだまま、人ごみの中の



役者絵も真つ青の男前に見とれていたと言う言い訳——を思い返せば、掏摸として満足に働けていたとは到底考えにくい。

栄江の見立てでは、奉公に出たものの馴染めなかつたなどの理由で、飛び出してしまったのだろう。かと言って家にも帰るに帰れず、仕方なく生き延びるために悪い仲間に入った、と言う辺りではないかと思う。文字も書けるし勘定も出来ることから、奉公先では多少教育をされていたはずだ。

「終わったら、小さな店くらい持たせようと思っただけねえ……」

若い人手があるのは大いに助かる。けれど、折角若いのだ。まだ幾らでもやり直しは出来る。まっとうに生きて、嫁でも貰って幸せに暮らすことが出来るなら、その手助けぐらいしてやりたい。

「な……っ！」

「お嬢様がそこまでなさることは……！」

さんじと祥平が驚いた声を上げる。

特に祥平は、さんじが元は掏摸だったと言うことと、栄江への口の利き方が気に入らないらしい。手代にもなって、三十路の坂も越えたと言うのに、何かと言っては歳

若いさんじと珍しく角突き合わせている。

「ま……、まさか。アンタそこを根城に、後ろ暗い商売を……。それで何かあったら俺に罪をおつかぶせて……。アンタ、飛んでもねえ婆アだな?」

そう言つてさんじは、薄気味悪いものでも見るような顔をしていた。さんじはこうして時々よく判らない妄言を口走る癖がある。

「あらあら。私がそんな恐ろしいことをするように見えて?」

お嬢様を馬鹿にするのか? と再びいきり立つ祥平を抑えながら栄江は、この子の頭の中は一体どうなっているのか、一度覗けるものなら覗いてみたいものだと思った。

もう一つ溜め息を吐くと、栄江はちよいとばかり痛い視線を感じた。その視線の元をたどれば、呼び込み口上をする男が、迷惑そうにこちらを見ていた。

あらあら。木戸を出たばかりのところまで立ち止まったまま、揉めていればあれくらい睨まれても仕方がないわね。

ここから動かなくては。それには、さて。ふと考えて、再び溜め息を吐いた。

「サアサア、そろそろ行かないと」

見合いなんぞ真つ平ごめんだけれど、二人を引き分けてこの場から離れるにはそれ

くらいしか思いつかなかった。

「ナンダ、婆さん腹ア括ったか」

「参りましょう」

「アア、気が変わらねえ内に行った方が良いぜ。善はなんとやらだ」

「善は急げ、だろう」

「なんだナ、混ぜっ返すんじやアねえヨ。婆さんの気が変わっちまわア」

「ならば間違えずに言ってみろ」

二人は仲が良いのか、悪いのか判らない調子で言い合いを続けている。

やれやれ。

ああ、見合いなんて気が重いわ。

即答で断ってもダメ、やんわりと断ってもダメ。断るにしても塩梅と言うものがある。全く面倒くさいことだ。栄江は言い合いを続ける二人を見ながら、この後のことを思っ、憂鬱の溜め息を洩らした。

了



エアコミケ 2

# 寝床屋の無料配布

2020/12/30 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: [nedocoya@gmail.com](mailto:nedocoya@gmail.com)

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。  
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

お芝居（歌舞伎）と言うのは、朝も早よから出かけて、  
芝居茶屋、ご飯、終わった後の宴会まで、  
丸一日がかりで楽しむ方や、一幕、二幕だけでも  
いいからじっくり見るんだと言う方もいれば、  
安い料金の立ち見でも良いからとにかく  
毎日通うんだと言う人と、  
人によっていろんな楽しみ方があったそうです。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが  
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、  
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## \* おねがいとおことわり \*

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。